

相場観の具体的な立て方とは 役立つ時間関係からの判断

先を読むために意味深い 9000円水準

前回まで3回にわたり08年10月の大暴落について解説してきました。危機的状況の株価における説明は多々ありました。これら説明の仕方、そして個々人の対処の仕方への反省が余り見られぬことは大いに不思議ではあります。

一目山人は「相場は時に化けものであります」と述べておますが、出発点を間違える、対処を誤ることは通常の相場を化け物にしがちなものです。すべての要点を押さえておくという心構えが必要であります。

ともかく、これまでの3回で変化日、変化週、変化月についての活用についてご説明しました。残り2回の均衡表講座では何を語るべきか大いに悩んでおりますが、今回は相場観の立て方の具体例として8月10日現在での日経平均株価の相場観を述べてみましょう。

2008年10月10日陰線は底値モチアイ(10月28日を大底と見なすかどうかは別として)の起点としてこれまで重視し続けてきました。

起点としては確かにもの、水準

自体を定めるのは決して楽なことではありません。

10月10日の陰線は高値9016円、安値8115円と大幅であり、私自身は下げ過程での計算値水準8800円、あるいは逕行スパンが交わる8328円などをその時々の変遷に応じて用いてきました。

08年10月10日から基本数値183日目の7月13日安値からの上昇では改めて9000円水準が強調されている相場変遷であることがわかります。

この陰線での高値は9016円、117日目の09年4月6日に8992円、4月10日高値9066円、4月16日高値9030円、5月18日安値8997円、183日目7月13日安値9050円となっており、3月10日安値以降の変動は同じ10月10日陰線を起点としても意識すべき水準が変化していることがおわかりになるでしょう。

一方、3月10日までの変動は10月15日高値9601円と10月28日安値6994円の半値水準8300円どころ、これは10月10日陰線が逕行スパンと交わる8328円に見合うものであります。より意識されます。

3月10日安値は10月10日から99日目、08年6月高値から10月28日安値までの下落日数が99日であり、変則的ではあります

がこの時間償却を経るまでは8300円水準が意識されます。時間経過が成された後9000円水準が意識されるという事実を深く認識して頂きたいと思います。

相場水準それ自体の上昇であり、このような変化は基準線そのものの上昇、下落と同様に相場の方向性を大いに示唆するものとなります。

時間関係から下げ圧力の 懸念が薄らぐ

3月10日以降の変動は3月27日高値までの上昇で、一応は「上げ」そのものの能動性を持つことになりますが、3月10日での時間経過は08年6月高値から10月安値までの時間償却を意味するものでしかありません。また3月10日、08年11月高値から83日の三波動構成、一応はこれも下げ償却が成されているともいえますが1月高値からの下落に対する下値処理は定かでは

ありません。3月10日を中心とした対等数でモミアイが続くことも、初動が小さければ当然考えねばならぬことあります。

結果的に3月10日からの変動は9000円水準を意識させられるものではありますが、9000円×2 - 7000円 = 1万1000円とすれば8月7日現在で未だに08年10月10日からのモミアイは続いていると捉えることが出来るわけです。

安値からの時間関係では08年10月28日から09年3月10日までの88日が7月16日に、3月10日安値から5月18日までの45日が7月17日に経過したことで7月13日安値からの上昇そのものの独立性と6月12日高値から7月13日までを第二波動とする上げ三波動が強く意識出来るのです。

さらに3月10日を中心とする99日間の時間関係が8月3日に経過したことで下げ圧力がかかる懸念も消えました。

9000円水準の重要性を同時に考えれ

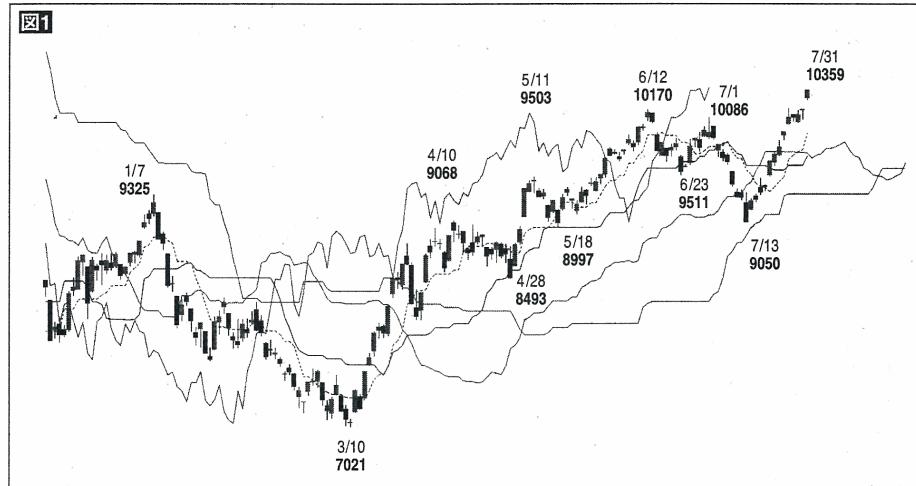
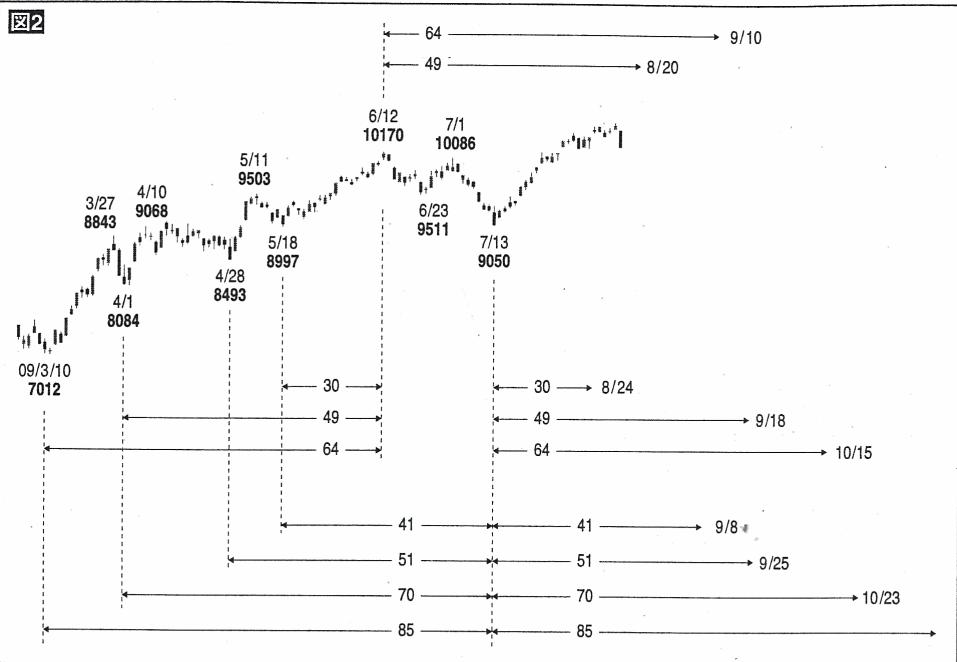


図2



ば1万1100円(4月10日E1万1115円、7月13日N1万1136円、4月28日起点)、あるいは1万1300円(6月12日E1万1343円、5月18日起点、V1万1290円)には達すべき変動であると本来であれば認識せざるを得ないのです。

1 万800円を 強く意識した展開に

問題は08年10月の極端な下げ方であり、日足波動変遷としては08年9月22日高値1万2263円に達しても戻り相場に過ぎないという状態です。それ以前に10月1日の小さな戻り高値(これは月足にそのまま反映される形となります)1万1456円が意識され、さらに下げが加速された10月6日以降の日々の値段がここまでネック

になり続けているのであります。

10月10日陰線高値9016円を超えたのは今年4月10日ですが、10月9日安値9100円を超えるのに16日を要しています。

10月8日陰線高値1万11円、10月7日陰線安値9916円を6月12日までの上昇で越えましたが、10月7日陰線高値1万363円を越えるまでに30日以上をかけています。8月7日現在の終値は1万412円で08年10月6日陰線安値1万374円を越えていますが、10月6日陰線高値は1万839円、08年6月高値からの下げ幅のちょうど、半値戻しの水準なのです。週足先行スパン上限に見合う水準と重なるこの株価は、上げ過程で懸念される計算値であることがおわかりになるでしょう。

未達成計算値は3月27日E1万665円、4

月28日N1万540円、5月11日E1万513円(4月28日起点)、7月13日N1万727円(4月28日起点)ですが、6月からの変動を高値モチアイと捉えれば基準線と転換線の交わった9850円水準を中心とする高値の限界 $9850\text{円} \times 2 - 9050\text{円} = 1\text{万}650\text{円}$ が1万800円水準に至る過程で強く意識されざるを得ないのであります。

したがって相場を明るいものにするためには、何よりも1万800円水準へ早期達成することが大事であり、計算値、変化日からの深押しは上値の限界を時間経過とともに知らしめるものとなってくるということになるでしょう。

8月4日高値1万479円は、5月18日N1万416円(7021円)を超えてはいますが、計算値が重いと見なさざるを得ないローソク足であります。

上げ相場であるものの極めて乗りにくい変遷が8月7日現在続いていることが、少し残念な推移といえます。しかしながら8月4日高値までの上昇日数16日は8月24日、25日の重要性を示唆するものであり、ようやく上げ相場での重なる変化日が自覚できたことは「良し」としたいところです。

8 月24日の変化日が 最重要ポイントに

6月12日から13日までを第二波動とする三波動構成での起点は3月10日、4月1日、4月28日、5月18日となります。この三波動での変化日は図のようになりますが、4月28日から6月12日までの30日に対し7月13

日から30日目、あるいは31日目の8月24日、25日が先ずこれまでの変遷(7月17日変化日を経過した後の)ではじめて出てきた重なる変化日なのです。

この変化日は8月4日を中心とする対等数の関係もありますから、上げであっても下げであっても生きてくることが予想されます。特に8月24日は6月12日高値から51日目、昨年10月28日安値からは201日目の基本数値となります。このため、8月24日変化日を最重要とし、この変化日までの上昇を軸として細かい対処していくことになるでしょう。

警戒すべきはここからの上昇で変化日8月24日に7月13日N(4月28日起点)1万727円に達しないケースでありますが、変化日を前にして週足先行スパン上限に達することが出来れば、急落あっても決して悲観する状態ではないでしょう。7月13日までを第二波動と置く上げ三波動では、11月16日まで時間が残されているのであります。

本誌発売時には8月24日の表れ方がはっきりとしていることでしょうが、基本的には11月16日までの上げ相場、1万800円、1万1000円の達し方いかんで相場が延長されるか縮小されるかが決まることになるでしょう。

11月を過ぎれば一目均衡表講座でも何度も強調してきた2010年2月重要変化日が控えています。次回の最後のまとめは11月変化日での変動を踏まえて平均株価の今後を考えてみたいと思います。

基本波動を確認することが判断を下すキーポイントに

2 010年2月が今後を占う重要変化月

前回は相場観の立て方の具体例として日経平均株価変遷について述べました。

「本誌発売時には8月24日の表れ方ははつきりとしていることでしょうが基本的には11月16日までの上げ相場、1万0800円、1万1000円の達し方いかんで相場が延長されるか縮小されるかが決まってくることになるでしょう。

11月を過ぎれば均衡表講座でも何度も強調してきた2010年2月重要変化月が控えています。したがって次回の最後のまとめは11月変化月での変動を踏まえて平均株価の今後を考えてみたいと思います」

このようにまとめました。実際の変動は8月31日高値1万0767円に達したもの続かずに、また大きな下げ相場にも転じることなく11月を迎える事となりました。11月6日現在終値9789円で日足均衡表はすべて悪化していますがこの変遷では大きな下げ相場も考えにくいのです。

本誌発売時(12月第三週)に1万0200円を超えているならば2008年10月からの大きなモミアイ相場、2009年6月12日からの高値モチアイが同時に成されているだけに示

唆するものは多いのですが、1万0200円以下では2008年10月からの長期モチアイとしてしか捉える事が出来ず、判断困難な状況が続くとせねばなりません。ただし、いずれのケースでも2010年2月変化月は極めて大事です。

戻り高値か二番底になる可能性大

2010年2月の変化月は、2007年の一目均衡表講座でも既に出していた変化月となります。03年4月安値から83ヵ月目、07年2月高値から37ヵ月目という長期変遷での波動の重なる変化月になります。

96年6月高値から03年4月安値までは83ヵ月、2000年4月高値から03年4月安値までは37ヵ月であり、二つの重要な高値からの三波動構成が重なるポイントとなりますがそれだけではありません(図1参照)。

90年6月高値の二番天井から2000年4月高値まで119ヵ月に対し2000年4月高値から119ヵ月目。

小さいものでも07年6月高値から08年10月安値の17ヵ月に対し07年10月から17ヵ月目と89年以降の重要な高値からの三波動構成の重なる変化月が2010年2月な

のです。したがって、この2月が戻り高値となるか、底値あるいは二番底となる可能性は極めて高く09年変動では何れになるかを推し量るための月と捉えてきました。

しかしながら現在(11月6日)月足変遷では、なお08年10月の陰線一本に含まれる変動が続いており、月足転換線を越えてはいるものの、やはりモミアイ相場といわざるを得ない状態が続いています。

さらなるモミアイ継続の可能性も高いと言えますが、とにかく2010年2月変化月の基準線は1万0800円水準まで下落、転換線は(位置を変えない可能性もありますが)恐らく上げてくるでしょう。狭まった均衡表からの放れ(図2参照)はひとまず相場の方向性をなす可能性が高く、2010年2月時点での相場の位置はとくに注目せねばなりません。

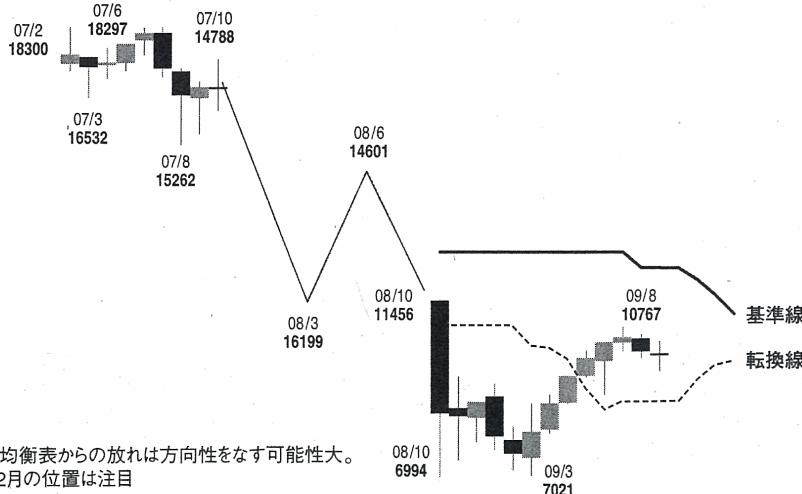
実は前回の均衡表講座では2010年2月の位置とその後の変動についてある程度

ハッキリしたことがコメントできるものと考えていました。しかしながら08年10月陰線を越えられぬまま8月31日に上昇力を失い、かといって定型を逸脱する下げ幅を見せないここまで変動を見るとハッキリしたことが言えないのです。

08年10月陰線高値は1万1456円、09年3月安値以降の上げ三波動構成でのN計算値に見合うものであり、この水準以上を達成しての下落であれば戻り相場の終了と2010年2月までの下落を念頭に置いたのでありますが、8月高値は週足先行スパン上限に過ぎず07年10月10日陰線を相場水準とするモミアイ相場の範疇を越えません。これまでの変遷で9000円の相場水準は強固であり2010年2月高値月が高値となったとしても07年10月安値割れに繋がるかどうか確定できないのです。

また仮に2010年2月までモミアイ継続が成され、この変化月からの上昇が見られ





狭まった均衡表からの放れは方向性をなす可能性大。
2010年2月の位置は注目

たとしても下げる月足基準線、これを越えても二本の先行スパンはネックとなるため08年10月安値も大底と見なすには難ありと考えなければなりません。

05年1万2000円を超えてからの相場化した変動、あるいは03年4月安値からの初動のように一般投資家が楽に利益しうる変動は今後しばらく期待しがたいというものが現時点での相場観です。

したがって投資家にとっての勝負所は随分先になる可能性が高く時間的には余裕が出来、勉強のための格好のチャンスになると思います。これまでの経験を生かすためにも本誌読者は過去変遷を確認し、本当に相場になりうる時期とポイントを自身で探って頂きたいと願っています。

一 目均衡表で確認したい 最重要事項とは

今回で『株価予報』は25年の歴史に幕

を閉じる事となります。一目均衡表講座も基本数値として大変区切りの良い26回を最終回とすることになりました。

語りえぬこと、強調出来なかった事など反省点も多々あります。最後に重要事項の再確認をしておきたいと思います。

まず相場は入り口がとにかく大事であって引かれ玉で対処に困るような入り口を定めてはいけません。均衡表での入り口は原則として三波動目、底堅いと見なせる下げ過程を経て、準備構成(基本数値での底値固め)確認後の放れであります。

一目均衡表では何よりも時間関係が大事ですが、変化日において相場実線と均衡表が一致するというポイントからの騰落は相場の方向性を成しやすいことを肝に銘じてください。

また相場の出口は原則として三波動構成のポイント(計算値よりも時間関係を重視すべき)とすべきであり、均衡表を含め

て野線の転換サインなるもの出現を待つべきではありません。

十分利が乗っているにもかかわらず予定していた出口を逃して野線の悪化で投げる、ということでは次の入り口を見出しが困難になります。相場の出口は次の入り口に直結するものであり、だからこそ利食い売り、損切りが大事なわけです。が、想定外の利益、損失は時に大いに反省せねばなりません。

09年3月からの上昇では二倍、三倍になった銘柄も少なくありませんが、これによって大きく活気づいた気配はなかったのです。これは08年の暴落が決定的に尾を引いているからであり、いかに相場上手でも直近の経験には左右されやすいものです。

あるいは2005年5月以降の上昇では2年間我慢して売らざるにいたものを1万3000円に至る過程で整理してしまい相場化した数ヶ月の変動を逃してしまった人もいます。よくお考え下さい。

一目均衡表は相場予測、あるいは予想のためのものとして一般的には強調されがちですが、何よりも相場の現在性を把握するものであります。現在性とは均衡表においてはどこが基本波動になっているのか、という事に尽きます。上げ相場は終わった、下げ相場は終わった、ここまでは押し目である、あるいは戻り高値である、という判断を下すための均衡表であり、相場変動論であります。

上げると判断するから買うのであり、下

げると判断するから売るという自覚を徹底して下さい。

想定したものと現実の違いが現在性の確認、すなわち売買に直結するのでありますから一般投資家であろうとプロであろうと「今どうなのか」という事を最優先すべきであります。

竹内一先生から私が最初に教えたことを述べましたが、それから20年、それなりにわかる様になって均衡表講座掲載から6年が経過しました。改めてこれまでの株価予報の巻頭文と一日均衡表講座を比較して頂ければ、私がこの6年間でどれだけ竹内先生から多くを吸収してきたかがおわかりになるかと思います。それ故に皆様にはこれまでの巻頭文をヒントにご研究いただきたいと願っています。

この一日均衡表講座の執筆は私自身大変、大きく成長させて頂けた仕事であります。

「遇無空過者」一目山人の言葉を最後に添えまして、竹内先生、株価予報読者の皆様、出版社に感謝します。

最後になりましたが2010年時期を見て私、細田哲生は三世一目山人を名乗り、改めて一日均衡表の啓蒙と一般投資家層の発展に努める所存であります。ありがとうございました。

経済変動総研では株価予報読者の皆様に感謝を込めて2010年3月に特別講演会を開催する予定です。

竹内一先生を講師としてお迎えし、私も一日均衡表についてお話しすることになると思います。

残念ながら無料でという訳にはいきませんが参加者には2008年の経済変動総研勉強会資料(ラジオ用コメントをわかりやすいグラフでまとめたもの)か一日均衡表DVDの何れかをプレゼントします。会費は10,000円程度、会場は東京の予定です。

詳細は一日均衡表公式ホームページで告知します。パソコンをお持ちでない方は2010年2月1日以降に(株)経済変動総研(090-3698-3427)にお問い合わせください。